

て斯く言はく「我れ生々世々に、常に生れて相はむ」といひき。隣の家の女に生れ、終に子の妻と成り、自が夫の骨を祠りて、今慕ひ哭く。本木の事を知り、故に我れ哭くのみ」とのたまふ」とは、其れ斯れを謂ふなり。また経に説きたまふが如し「昔人の兒有り。其の身はなほだ軽く、疾く走ること飛ぶ鳥の如し。父常に重し愛びて守り育ふこと眼の如し。父子の軽きを見て譬へて言はく「善きかな、我が兒、疾く走ること狐の如し」といふ。其の子命終りて後に狐の身に生る。善き譬を願ふべし。悪しき譬を欲はざれ。かならず彼の報を得るが故なり」と。

極めて窮しき女千手観音の像を憑敬ひ福の分を願ひて大なる富を得る縁 第四十二

海使表女は、諸楽の左京の九条二坊の人なり。九の子を産生みて、極めて窮しきこと比無く、生活くこと能はず。穂積寺に向てて千手の像に福の分を願ふ。一年満たず。大炊天皇の世の天平宝字七年癸卯の冬十月の十日に、慮はずより外に敢に其の妹来り、皮櫃を以ちて姉に寄せて往く。脚に馬の屎

染む。曰はく「我れ今来らむとするが故に、是の物を置くなり」といふ。待ても来らず。故に往きて弟を問ふ。弟答へていはく「知らず」といふ。爰に心の内に思ひ怪び、櫃を開きて見れば、錢百貫有り。常の如く花と香と油とを買ひて、擧げて千手の前に往きて其の足を見れば馬の屎著けり。爾うしてすなはち疑ひ思はく「菩薩の錢を脱へるか」とおもふ。三年を過ぎて、千手院に収めたる修理分の錢百貫無しと聆く。因りて皮櫃は彼の寺の錢なりと知る。闇に委る、是の錢は観音の賜ふ所なり、と。賛に曰はく「善きかな、海使氏の長いたる母、朝に飢ゑたる子を視て血の涙を流泣き、夕に香と燈とを焼きて観音の徳を願ふ。応へて錢家に入りて貧窮の愁を滅し、感へて聖福を留めて大に富める泉を流ふ。兒を養はむとして徳に飽き、衣発きて晰に委る、子を慈びて祐を来らしめ、香を買はむとして価を得たり」といふ。涅槃經に説きたまふが如し「母、子を慈び、因りて自づから梵天に生る」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。斯れ奇異しき事なり。

一 自分の前生での夫。
二 過去世における原因と、現在世におけるその報果と。

三 未詳。

四 上文には「疾走如飛鳥」とあった。上巻二縁には狐の子に關して「走疾如鳥飛」とみえる。五 発せられた「ことば」は「ことごと」として実現される、という考えにもとづいている。

六 因果応報の思想とは異なる。

第四十二縁 今昔物語集・十六ノ十に書承。

七 若為富饒種種珍寶資具者、当三於如意珠手。二 千手眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經。

八 未詳。本説話以外に所伝をみない。

九 大和国飢、賑給之。二 統紀天平宝字七年六月二十五日条。九人の子をもっていることに加えて飢饉があった。

一〇 左京九条四坊二坪（奈良市東九条町）に所在した寺。九条二坊から遠くはない。

一一 下文に「如常買花香油、擧三千手前」、贊に「夕焼香燈、願觀音徳」とみえる。花、香、燈を供えて福分を願つたのである。

三 原文「一年不満足」。一年間は願いがかなえられなかった。

三七六三年。

四 原文「不慮之外」。「不」と思之外（下巻二十五縁、「不見之外」下巻二十七縁）などとも見える。

五 ちようどその時に。

六 妹。女きようだいの中での年少者。現代語での用法と一致し、上巻三十一縁の用法とは異なる。

七 あずける。

八 きようだいの中での年少者。上文には「妹」とあった。

九 馬の屎は観音の靈験の証拠となつてゐる。

一〇 観音菩薩。

一一 過三年（胎）（原文）とあるが、このように時の経過を記述することの意味は不明。

一二 穂積寺の一部で、千手観音を安置した堂であらう。

一三 堂塔修理の費用の錢。

一四 菩薩。観音菩薩。

一五 九人の子を養おうとして、養うに十分な福分を得た。

一六 屎に汚れた観音の足が見えたので。

一七 「如是女人、慈念功德、命終之後、生於梵天」（大般涅槃經・壽命品）。